



完成当時の航空写真。246号線と秩父宮ラグビー場に挟まれているが、公開空地によって一体的な開発になっている。

銀座線・外苑前駅を出て青山通りを赤坂方面に歩くと、マホガニー・レッドの壁面が姿を現す。これが「伊藤忠商事東京本社ビル」である。竣工後三二年を経過していても古さを感じさせない同ビルは、窓ガラス面を壁面より後退させた彫の深い落ち着いた外観を誇り、絵画館へ続く銀杏並木を背景にどっしりとした重厚な佇まいを見せる。

社会的変動の時代に つくられた本社ビル

入ると、大阪本社の機能はほとんどが東京本社に移管されていた。加えて、日本橋に設けた東京本社には二〇年以上が経過し、明らかに手狭となっていた。そして、機能の再編も視野に入れた新東京本社の建設計画がもちあがったのはこの頃である。当時、日本の商社としての生命線であった繊維はアメリカの繊維輸入制限などで苦境に立たされていた。一九七七（昭和五二）年、同社は鉄鋼部門を中核に置く安宅産業株式会社を合併し、繊維貿易中心からの脱却をはかり、名実ともに総合商社として世界に歩みだした矢先でもあった。

東京本社の移転地は数々の候補が挙げられ、売り込みも多数あった。設計は、日本の大手組織設計事務所・日建設計が担当することとなった。

伊藤忠商事は、日建設計の協力のもとに新本社候補地の検討を行った結果、既存のハザビルを含めた一万九、五〇〇平方メートルの土地をひとつの街区とする民間による市街地再開発事業によって整備された土地に新東京本社を建てるこ



第三回受賞作品（一九八二年） 伊藤忠商事東京本社ビル 前編

時代を象徴するファッションと情報が行き交う青山通り。世界と肩を並べる日本の経済成長を後押しした総合商社の凛とした姿を体現すべく、伊藤忠商事の東京本社ビルは建っている。

自然石を用いた外壁は重厚感がありながら、どこか親しみを感じさせる印象を持つ。



建築主より

随所に残る 伊藤忠らしさ



伊藤忠商事株式会社 人事総務部
フアシリティ・マネジメント室長
矢吹直人 Naoto Yakuki

社員全員で意識改革をしなければ歴史の潮流に取り残されてしまうという危機感があったのです。「本社ビルにお金をかけるなんてとんでもない」といった意見もある中、実現にこぎつけるのですが、それまでの諸先輩や歴代経営陣の努力は筆舌尽くしがたいものだけに違いありません。

一九七〇年に計画が始まり、戸崎誠喜社長（当時）が一九七七年に最終方針を決定、その後一九七八年に着工し三二カ月の工期を経て一九八〇年に完成しました。幾多の困難の中を乗り切った一〇年にわたるこの歴史的事業は今でも語り草です。

「ラーメンから飛行機まで」と言われた総合商社にとって一九七〇年代は「冬の時代」です。業界的な不祥事や経済的打撃などもあり、

しかし一方で、近江商人であった初代伊藤忠兵衛の経営哲学を確実に引き継ぐ商社として、「三方よしの精神」（売り手よし、買い手よし、世間よし）が反映された一大決心だったともいえます。特に時代を先駆けて環境に配慮した設備を導入した点は「世間よし」を表すよい例です。初代から受け継がれている「長期的経営視点を持つ」という近江商人の経営思想が随所にうかがえ、伊藤忠らしいなと感じます。



外壁のマホガニー・レッドはジェットバーナー仕上げと本磨き仕上げによって、より品格を感じさせる。

とを決めた。間組は、施工を担当することになり、土地の開発とともに、外苑前のハザマビルに本社を移転し、付近の青山通り沿いに並ぶ中小の個人店舗とその背後の個人住宅や共同住宅地の整理統合を進めた。

総合設計制度を取り入れた計画

このプロジェクトにおいて、建設設計の当時設計主管であった三栖邦博氏のチームは必要な床面積の確保とビルの高層化を実現するために総合設計制度の適用を受けることとした。

しかし、一九七一年（昭和四十六）年に制度化された総合設計制度は当時、まだ本格的な運用に至っていなかった。そこで計画建物によって生ずるビル風の予測と防風対策の効果を確認する風洞実験をはじめ認可を得るための数々の検討が重ねられた。ビル風と日影への考慮から生まれた雁行配置の平面形、建物内に車回しを取り込んだ青山通りの交通渋滞対策、公共の下水施設への負荷を少なくする中

水施設などがそれにあたる。そして一九七七（昭和五十二年）年、晴

れて総合設計制度の認可を得た。この制度によって、敷地面積の約三分の一を公開空地として一般に開放することで、通常は約六〇以上の高さ制限のところ、九〇以上を超える高さの建物が可能になり、また、中水施設や災害時非常用の備蓄倉庫など公益施設に見合う容積の割り増しを受けたことになる。青山通りから神宮外苑に通じる東側の広場は「C.I.プラザ」と命名され、店舗棟と大きなサンクンガーデンが設けられた。住宅や商店の協力を得て開発が行われたこの土地においては、公開空地の存在は街づくりを果たす役割が大きかったといえる。

縦横のつながりがあるまち

最終方針を決定する際、戸崎社長は①機能性と経済性を考慮すること②商社にとってふさわしいインテリジェントビルをつくること③重厚ななかにも近代的な品格と親しみやすい建物——との条件を出した。

かせなかった。

極寒の中の大量石材調達

外装仕上げには計画段階から議論が重ねられ、金属のカーテンウォールやプレキャストコンクリートの塗装など様々な案がでた。しかし、「一〇〇年の計」ということで、自然石で外装を仕上げる事となった。石材の選定にあたり、三栖氏のチームは三種類のモックアップをつくり、建築主に提案を行った。その結果、最終的にアメリカ・中西部サウスダコタ州の「マホガニー・レッド」が選定された。この石材は、加工を重ねるこ

とにより、色の濃さと深みが一層増すものあり、戸崎社長の想い描いていた会社のイメージと重ねることができた。

しかし、課題は二、一五〇立方メートルという大量の石材の調達だった。採石地は露天掘りで場所や深さによって色目にムラがあり、現地から送られてくる石には使用できないものも多く見られ、期待した仕上がりも工程の維持も危ぶまれた。これに加え、採石地を襲ったこの年の寒波は歴史に残るものであり、気候が影響した調達の遅れに施工者も苦勞が絶えなかった。そんな苦勞を目の当たりにした伊藤忠商事は社員を採石現場に派遣することを決めた。

「さすが商社だ」——日建設と間組はこの決断に感激した。極寒の採石地に五〇日間も滞在し、作業員の確保、労務管理、出荷量確保、品質管理等の現場管理を行った建設準備室の社員の苦勞は並々でなかった。しかし、この苦勞の共有が建築主・設計者・施工者のつながりをより盤石なものにしたと言っても過言ではない。



縦のつながりを実現した光庭の最上部に位置し、自然の光を最大限に採り入れ、西日や夏の日差しを遮光する立体トラス。

三栖氏をはじめとする設計チームでは、ワンフロアの面積が三、〇〇〇平方メートルを超える本社ビルが少なかった時代に、三、五〇〇平方メートルという基準階床面積を確保し、サービスコアを東西の端に設け、横のつながりを作り出した。さらに、床で区切られた各階のオフィスフロアを吹き抜けの光庭によって縦方向につなぎ、すべての階を見渡せ、一体感を生み出す、当時の本社ビルとしては画期的なものを提案した。

三栖氏のチームにとって、この光庭への思い入れが深い理由がもう一つあった。この建物の計画から施工までの一九七〇年代はオイルショックとそれにつづく狂乱物価、連続企業爆破事件など日本経済を震撼させる事件が相次いだ。多くの建物で照明が消され手探りで歩くような状況を目にした三栖氏は、人工照明や空調がなくても必要最小限の執務に支障をきたさない程度に自然採光や自然通風を確保することは、世界中でビジネスを展開する商社の本社ビルに必須の要件である、との思いを強くした。光庭に降り注ぐ「光」は社会的不透明さを感じる時代には欠

設計者より

光庭への自然光の取り入れ



株式会社日建設設計顧問
（当時 統括責任者）
三栖邦博 Kunihiko Misu

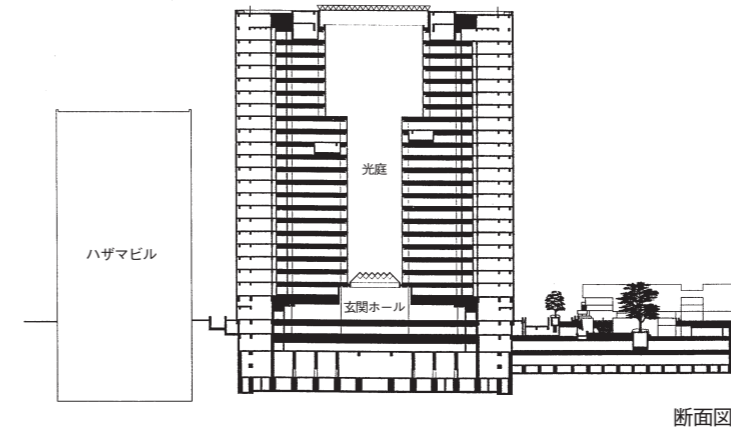
当時は入社して六年目、主管になって最初の仕事でした。それまでも日本IBM本社ビル、博多都ホテル、住友3M本社ビルの設計を担当し、伊藤忠商事東京本社の移転計画には土地探しの段階から関わりました。

昨今では当然の環境配慮も、「大気汚染」と「ビル風」ぐらいしか問題視されなかった当時、オイルショック直後のこともあって、環境問題はもとより、省資源化が設計の大前提になりました。同時に、世界企業の本社として不測の

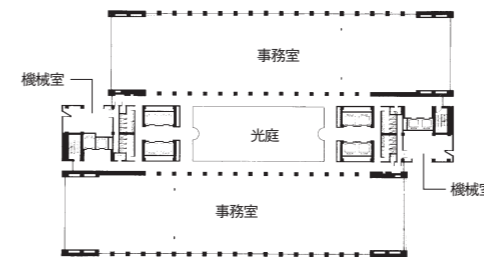
事態に耐えられるビルをつくることも課題でした。エネルギー事情の変動に柔軟に対応できる、電気ガス、灯油を併用する複合熱源方式の採用、電力消費の大きい夏期のピークカットのための非常時用自家発電機の常用運転、また、豊富な自然光を考慮したきめ細かい照明点滅ソーニングの設定などです。加えて、処理排水の中水利用や貯留雨水の中水補給水としての利用など、当時としては省資源化を徹底した先進的な建物でした。

また、玄関ホールに入ると受付周りの予想以上の明るさ、そして視線を上げるとガラス屋根を透かして広がる万華鏡のような空間に驚かれます。これは、光庭の最上部に設けられた日射調整トラス（一九七〇年×十七）が、光庭を囲むガラスに映り込む効果によるものです。このトラスは、ステンレスパイプの立体トラスに六、七径の穴を無数に開けたアルミ板約三〇〇枚を六〇度の傾きで取り付けたもので、光庭周囲のガラス面への日射による熱負荷を軽減するとともに、太陽光を拡散し柔らかな光に調節する役割を果たしています。

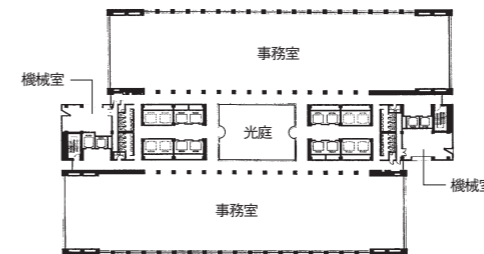
※一定の公開空地や公共負担を軽減する施設を設けることなどにより、容積率の割り増しと高さ制限の緩和を得て、設計することが可能となる制度。



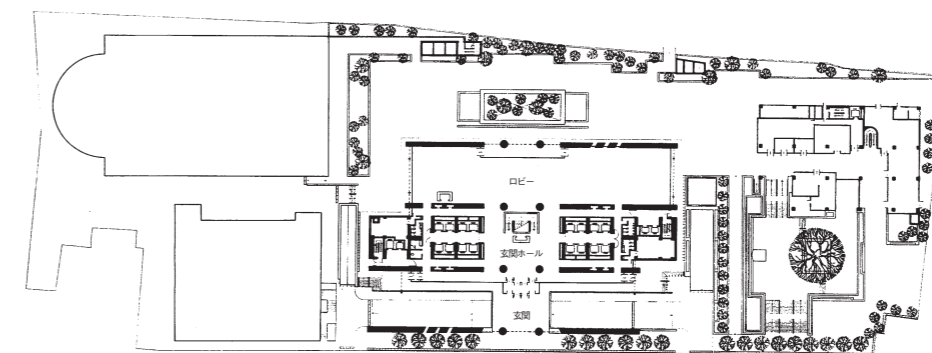
断面図



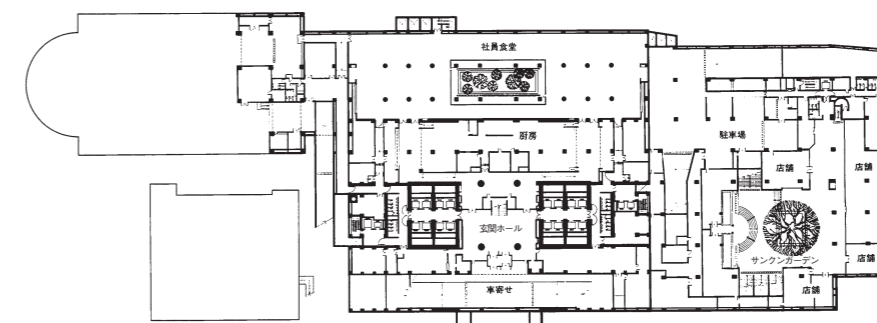
高層部基準階平面図



低層部基準階平面図



1階平面図



地下1階平面図

伊藤忠商事東京本社ビル

東京メトロ銀座線「外苑前」駅より
徒歩1分
東京メトロ銀座線・半蔵門線/
都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅
より徒歩5分



工事概要

所在地：東京都港区北青山2-5-1
 建築主：青山地所株式会社
 設計者：株式会社日建設計
 施工者：株式会社間組
 竣工：昭和55年10月
 敷地面積：19,480㎡
 建築面積：7,550㎡
 延床面積：112,860㎡
 階数：地下4階、地上22階、塔屋1階
 構造：鉄骨造、鉄骨鉄筋コンクリート造、
鉄筋コンクリート造